

欧州でみた日本植物研究史 II

清水 建 美

T. Shimizu: A historical outline of the investigation on the Japanese flora in Europe II

5. ライデン

アムステルダムから南汽車で30分ほどのところに学問の都ライデンがある。ライデン大学と日本植物の研究はとくに縁が深い。たとえば、西洋の植物学書が日本に入ったのは1659年のドドネウスの「本草書」(1554年刊)であったが、彼は晩年この大学の教授であった。

いうまでもなく、1609年に長崎にオランダ商館が開設されて以来、日本とオランダとの通商は盛んになり、それに伴って日本の植物はジャワを経由オランダ本国へと送られた。その結果、前報で述べたブラインのサツキツツジの紹介(1679年)が示すように、日本植物の記事は西洋ではまずオランダに現われた。

日本からオランダへの植物の移入は、1817年ジャワにバイテンゾルフ植物園(現在のボゴール植物園)が開設されるとますます盛んになった。キク科のツルハグマ *Blumea* 属にその名を残すブルーメ C. L. Blume (1776~1862) は、1818年にこの副園長となり、ついで1822年には園長となった。日本から送られてくる植物は、ここでブルーメによって研究され、彼が在園中に書いた *Bijdragen tot te flora van Nederlandsch Indie* 1巻(1825)および2巻(1826), *Enumeratio plantarum Javae et insularum adjacentium minus*

cognitarum vel novarum ex herbariis Reinwardtii, Kuhlil, Hasseltii et Blumei 第1集(1827, 28)などの著作の中には66種の日本植物の記載があるという。たとえば、*Bijdragen* 2巻第17集(1067~1169頁)には、ツルキジミシロ *Potentilla japonica* Bl. (現在は *P. stolonifera* Lehm.), ホウロクイチゴ *Rubus sieboldi* Bl., ケニシキギ *Euonymus thunbergianus* Bl. (現在は *E. alatus* Sieb. var. *ciliato-dentata* Fr. et Sav.), マユミ *E. sieboldianus* Bl., タラヨウ *I. macrophylla* Bl. (現在は *I. latifolia* Thunb.) などが記載されているが、これらはシーボルトがジャワに送った標本に基いたものである。現在、これらの標本は王立植物標本館(ライデン大学標本館)に保存されている。ここには、マユミのタイプ標本を示そう(図8)。Herb. Lugd. Batav. のラベルには *Japonia* と印刷されており、ブルーメの筆蹟で *Euonymus sieboldianus* Bl. の字が読みとれ、TYPE! と書かれたピンクの小さなラベルが貼ってある。ブルーメは1826年まで園長を勤めた後、1829年にはブリュッセルにできた王立植物標本館の初代館長になった。

シーボルト Philipp Franz von Siebold (1796~1866) はドイツのヴュルツブルクに生れドイツに育った



図8 ライデン大学標本館にあるブルーメの書いたマユミのタイプ標本

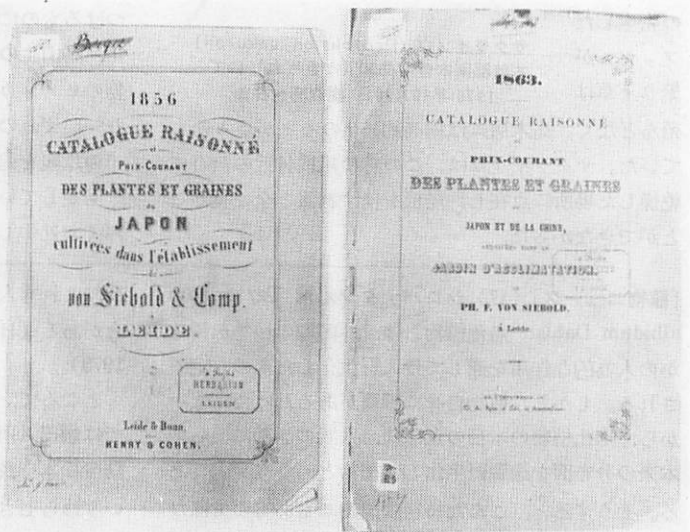


図9 シーボルトの馴育園から出版されたカタログの表紙

が、1822年オランダの軍医となり、1823年8月11日28才の若さでオランダ商館医として長崎にやって来た。彼が長崎郊外に鳴滝塾を開き、各地から集って来た高野長英、伊東玄朴などの蘭学者に医学を教えたことは有名である。1826年には江戸を往復、途中伊藤圭介や水谷豊文らとも逢っている。1828年いわゆるシーボルト事件によって国外追放となり1830年アントワープに帰った。この年、シーボルトはブリュッセルの国立植物標本館をライデンに移転させることに成功、それ以後ライデンに住んで、日本・中国植物馴育園 *Jardin d'acclimatation du Japon et de la Chine* をつくり、日本から持ち帰った植物を育てたのである。育てられた植物はその後広く欧州各国に分売されたが、図9は1856年および1863年に出たカタログの表紙である。ライデン大学の *Ooststroom* 教授は、シーボルトの馴育園は残念ながら彼の死後はすたれてしまい、現在は跡形もなくただ「シーボルト通り」*Siebold Straat* とか「出島通り」*Decima Straat* とかの町名を残すだけだと話してくれた。

さて、ライデン大学植物園はラーベンプルグ堀川にそったライデン・アカデミーの後方にある(図10)。この植物園は1532年創設1596年開園というから、イタリアのピサ植物園(1543年創設)ボローニャ植物園(1567年)東ドイツのライプチヒ植物園(1580年)などと並んで世界で最も古い植物園の一つである。シーボルトは、この植物園に自ら持ち帰り育て上げた何種類もの日本の植物を移入した。1937年の調べでは、シ



図10 ラーベンプルグ堀川に沿ったライデン・アカデミー(塔のある建物)

ーボルトゆかりの植物は29種あった(*Hortus Acad. Lugd. Bat.* 1587~1937)が、1973年には次の12種になってしまった(植物園の資料による)。

De volgende originele Von Siebold exemplaren waren in 1973 in de Hortus aanwezig:

- Acer palmatum* Thunb. イロハカエデ
- Aesculus turbinata* Bl. トチノキ
- Akebia quinata* (Houtt.) Dcne. アケビ
- Catalpa ovata* G. Don キササゲ
- Chaenomeles speciosa* (Sweet) Nak. ボケ
(= *Ch. lagenaria* (Loisl.) Koidz.)
- Juglans cordiformis* Max. var. *ailantifolia* (Carr.)
Rehd. オニグルミ
- Morus yeddoensis* Ex Hort. Sieb.
- Parthenocissus tricuspidata* (Sieb. & Zucc.)



図11 ライデン大学植物園にあるシーボルトの持ち帰ったオニグルミ(1975年3月6日撮影)



図12 ライデン大学植物園に1932年に建てられたシーボルトの胸像(1975年3月8日撮影)

Planch. ツタ

Wisteria floribunda (Willd.) DC. フジ

Wisteria sinensis (Sims) Sweet シナフジ

Zelkova serrata (Thunb.) Mak. ケヤキ

それでもオレンジュリーをよじ登るアケビやボケ、園内に堂々とそびえるトチやオニグルミやケヤキはシーボルト時代を偲ばせるに十分であった(図11)。ライデン大学は、シーボルトを記念して、1932年ヴェンケパッハ作のブロンズの胸像を園の西縁を画するウィッテ堀川を背にして立てたが、台石の前面には SIEBOLD の7字の外に「フォン、シーボルト」の文字が彫り込まれている(図12)。

シーボルトが日本を去るとき、ジャワを経由してオランダへ送った植物は大箱44個あり、そのうち22箱は生植物、5箱は果実と種子、17箱は腊葉標本・木材見本・植物図であったといわれる。彼は、春から夏の間は自らの馴育園を経営しながらライデンに住んだが、秋にはドイツへ移り住んだ。こんな関係からか持ち帰った標本の研究は、ミュンヘン大学のツッカリニ J. Zuccarini (1797~1848) が受けもった。こうして、1835~44年、シーボルト・ツッカリニ共著「日本植物誌第1巻」*Flora Japonica Sive Plantae quas in Imperio Japonico Collegit, Descripsit, ex parte in Ipsis*

Locis Pingendas Curavit Vol.1 がライデンで、続いて *Flora Japonica Familiae Nerales, Adjectis Generum et Specierum Exemplis Selectis* 1巻(1845)および2巻(1846)がミュンヘンでそれぞれ出版された。「日本植物誌」のタイプ標本は現在ほとんどがレニングラードにあり、1部がライデンに残されている。重複標本はライデンおよびミュンヘンに豊富である。図13に、アジサイ *Hydrangea azisai* Sieb. (現在は, *H. macrophylla* (Thunb.) Seringe) とクサアジサイ *Cardiandra alternifolia* Sieb. et Zucc. のタイプ標本を示しておく。

シーボルトの協同研究者をつとめたツッカリニは、その後1848年に病歿したので「日本植物誌第2巻」は、ミッケルに受けつがれ、1870年に出版された。「日本植物誌」第1巻は、双子葉植物100図、第2巻は裸子植物のほかカエデ属・ノグルミ・サワグルミなど50図を収録しているが、これらはシーボルトが準備した800図のうちの一部にすぎず、残りは未出版のままタイプ標本とともにレニングラードに買収された。

シーボルトが日本から持ち帰った標本類のうち、伊藤圭介らから献呈された次のいくつかの腊葉帖は、一般標本庫ではなく別室のロッカーに格納されている。

(1) 伊藤圭介の腊葉帖第1集7冊および第2集7冊

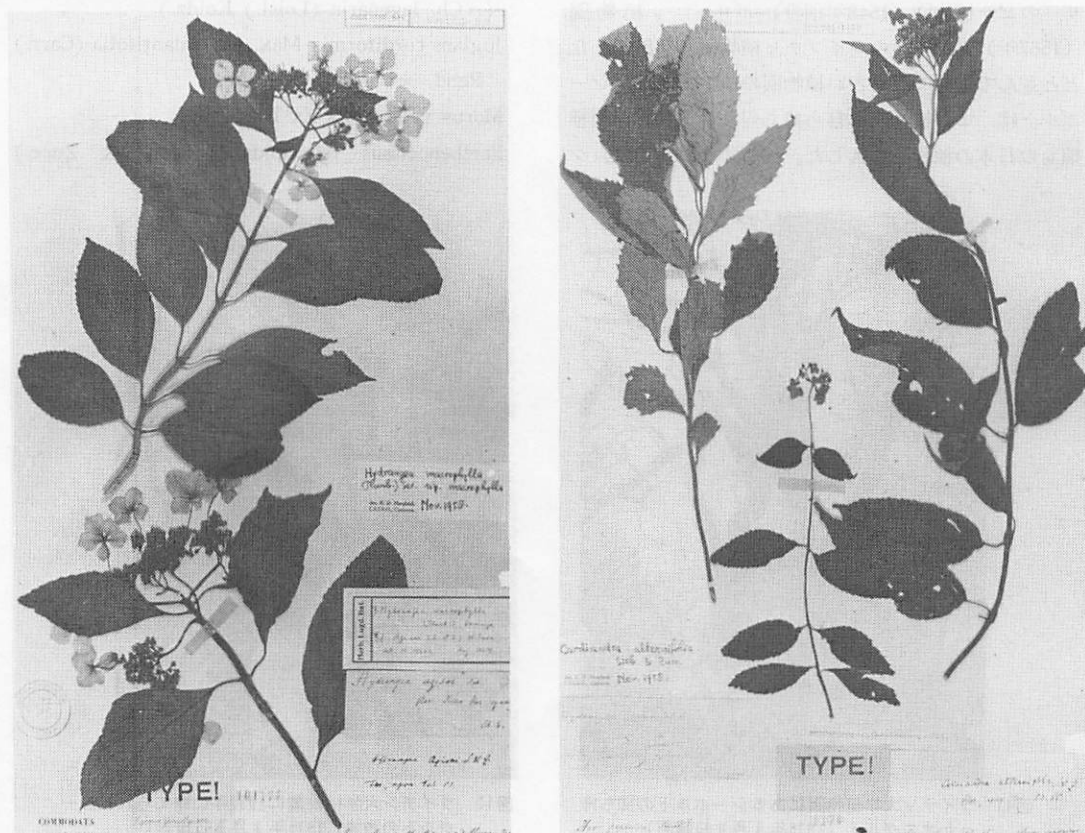


図13 ライデン大学標本館にあるシーボルトとツッカリニの書いたアジサイ(左)とクサアジサイ(右)のタイプ標本

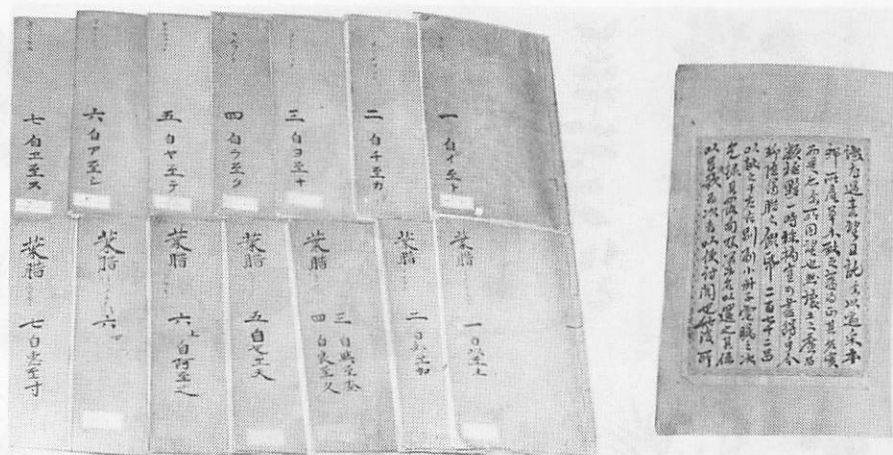


図14 ライデン大学標本館にある伊藤圭介の腊葉帖全14冊と第1集第1冊第1頁の序文

(図14)。縦31cm巾25.7cm, オレンジ色のカバー。第1集1~272番, 第2集417~627番の計483種を収める。左頁に押葉を貼り, 次頁にその記載があり, 裏表紙内側に Itoo Keiske de Owari の署名をみる。この腊葉帖の中に, ミッケル命名に成るイワショウブ *Tofieldia japonica* Miq. (第1集第1冊第2番, 図15), ホトトギス *Tricyrtis japonica* Miq. (現在は *T. hirta* Hook., 同47番, 図15), ショウジョウバカマ *Sugerokia japonica* Miq. (現在は *Heloniopsis japonica* Maxim., 同第7冊256番), スマトラノオ *Lysimachia fortunei* Maxim. var. *gracilis* Miq. (第2集第2冊443番)などのタイプ標本をみる事ができる。

(2) *Plantae e insulula Jezo communicavit Archiaetae Jedo* 1826 第1, 2冊。縦28.5cm, 横25.5cm。原

博士は, *Herbarium Medici Jedoensis* と副題をつけられた。第1冊に1~160番, 第2冊に1~110番の計270種を収める。この中にヤマウツボ *Lathraea japonica* Miq. (第1冊11番), エゾエンゴサク *Corydalis jezoensis* Sieb. (現在は, *C. ambigua* Cham. et Schlecht.), 伊藤圭介に献名されたスズラン *Convallaria keiskei* Miq. (第1冊65番), シラネアオイ *Hydrastis jezoensis* Sieb. (現在は *Glaucidium palmatum* Sieb. et Zucc., 第1冊125番)などのタイプ標本が含まれている(図16)。標本はパラフィンで留めてあるのがおもしろい。

(3) *Herbarium generale japonicum a botanico japonicus collectum* 第1~4冊。原博士は, *Herbarium Botanici Kaiso* の副題をつけられた。図17にその1枚を示す。

(4) 蝦夷地土産草木1 *Der Zaameling der Esoosch plantem* シダ植物も含まれているのが珍らしい。

(5) 雑草押葉46種, 同35種, 同29種, 3冊

(3)~(5)には特記すべき植物は含まれていない。このほか, いたみのはげしい腊葉帖がなお数冊保管されていた。

解剖学を専攻しているライデン大学のバース博士は, シーボルトが持ち帰った木材見本を調べているとのことで, 博士の厚意でそのうち20点ほどをみる事ができた。判明するものについては乞われて同定もおこなった。シーボルトがこれらの木材見本をどうして入手したかは分らないが, いずれも 5×8.5cm ほどのうすい板で, 表面に彩色された枝葉と和名, 時には属名や用途まで記され, 裏面にはシーボルトが書いたと思われる番号およびローマ字つづりの和名

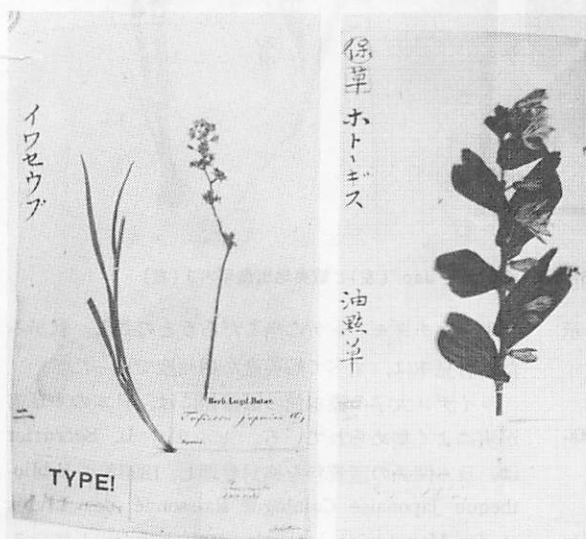


図15 伊藤圭介の腊葉帖に含まれるイワショウブ(左)とホトトギス(右)のタイプ標本

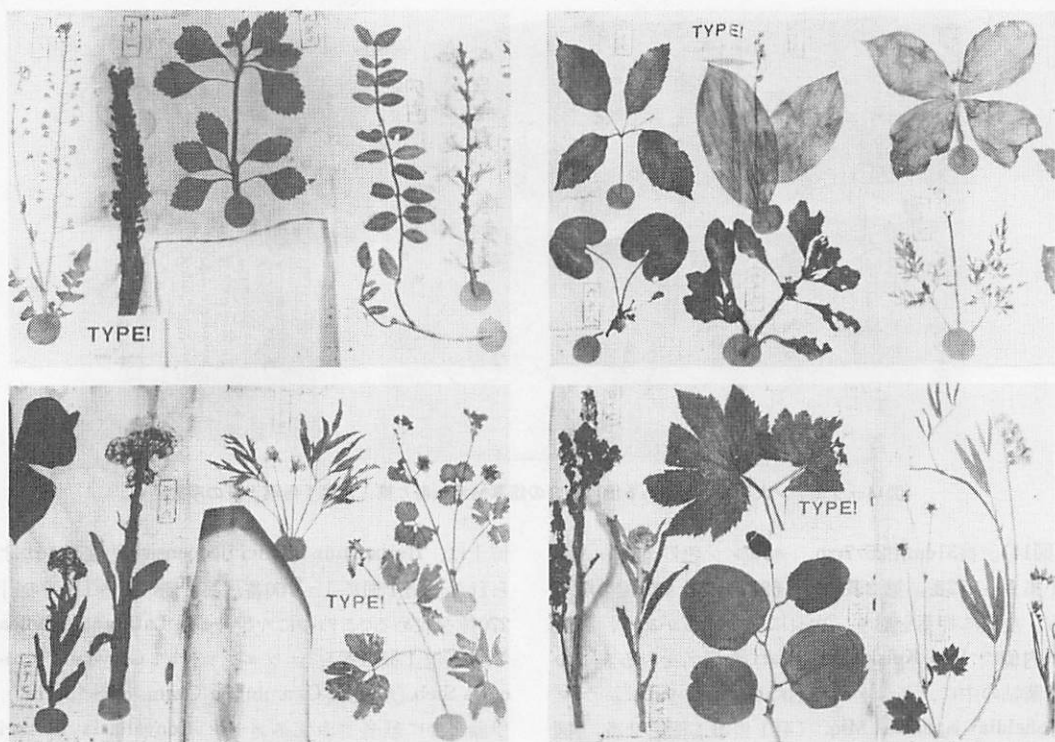


図16 江戸薬園の腊葉帖とそに含まれるヤマウツボ(左上)、エソエンゴサク(左下)、スズラン(右上)およびシラネアオイ(右下)のタイプ標本

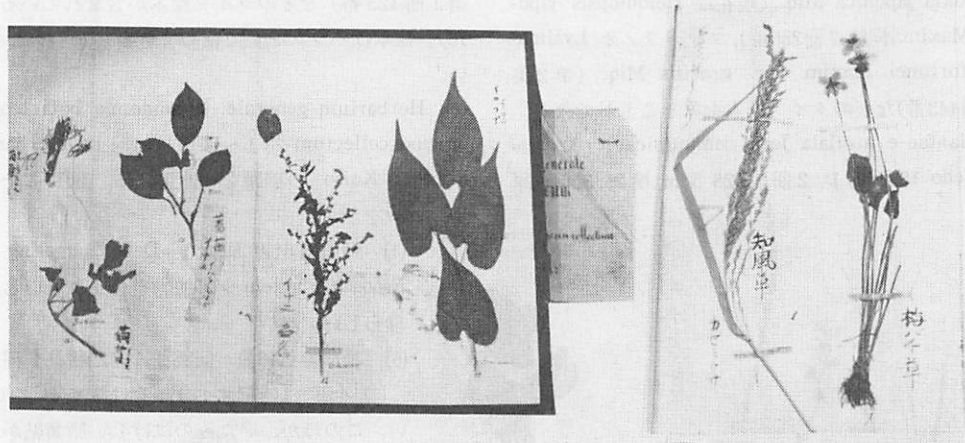


図17 ライデン大学標本庫にある腊葉帖Herb. Gener. Jap. (左)と蝦夷地土産草木1 (右)

と産地がある。ここには、4点の木材見本の写真を示す(図18)。すなわち、

相州ユク(裏面に、209 Yuku Sagami)

コタソギ、かたそぎ、蝦夷チケシラニ(184 Kota-sogi Katasogi Yezo)

塩地 蝦夷ビンニ(190 Binni Yezo)

相州ソロ 一名シテ 椎茸ヲ作(178 Soro Site Sagami)

である。倉田博士によればそれぞれフジキ・クマノミ

ズキ・ヤチダモ・シデに当るだろうとのこと。私がみた木材見本は、すべて蝦夷産か相州産であった。

ライデン大学の標本館の図書館には、日本の本草書が実によく集められている。セルリエ L. Serrurier は、日本関係の諸資料を検討整理し、1896年に *Bibliothèque Japonaise Catalogue Raisonné des Livres et des Manuscript Japonais* という本を出しているが、219~230頁には50点の日本本草書の解説がある。これらの本草書の中には、シーボルトの手を通して入



図18 ライデン大学標本館にある
シーボルトの木材見本4点



図19 ライデン大学標本館の図書室にある
シーボルトが持ち帰った本草書「花集」

ったものも多く、たとえば、「花集」にはシーボルトへの献本のことが書き込まれているし、表紙には青インクで「シーボルト様に進上せし分」と書かれたリボンが未だにつけられている(図19)。

シーボルトは、1859年、63才の折息子のアレキサンダーを伴って再び来日し、1861年江戸を往復、翌年離日1863年1月に西ドイツのボンに帰着しているが、このときは見るべき足跡を残していない。

ブルームの跡をついで、1862~71年王立植物標本館の二代目の館長をつとめたのはミッケル F. A. W. Miquel (1811~1887) である。前述のように、彼はツ

ッカリニの死後シーボルトの収集品を研究して「日本植物誌第2巻」(1870)を完成させたが、これとは別に「日本植物前誌」Prolusio Florae Japonicae 第1部~第6部(1866~67)を書いた。この中には、ツリフネソウ *Impatiens textori* Miq. (第1部8頁)、シデシャジン *Phyteuma japonicum* Miq. (第2部123頁) など、シーボルト・ブルガー・Buerger・伊藤圭介・テクストル *Textor*

・オルダム *Oldham* などの採集品をもとにして多くの新種が書かれている(図20)。

6. キュー

ロンドンの郊外にある王立キュー植物園(通称、キュー・ガーデン)は、規模や充実度はまさに世界一である。面積120ha、温室76棟、培養植物25000種類を擁し、併設の標本館には700万枚余の腊葉標本が収められている。創設は1759年であるが、1841年に王立となり、ウィリアム・フッカー W. J. Hooker (1785~1861) が初代の園長となった。1860年頃、イギリスからペイチ Veitch やフォーチュン Fortune などの園芸家が相次いで来日し、植物採集をおこなったが、キュー植物園からはウィルフォード Wilford が1860年の夏にやって来た。一方、オーストラリアの旅行家ホッジソン Hodgson は1859年6月に来日、翌々年の3月まで長崎および函館の領事として滞在し、この間植物を採集してキューに送った。

ホッジソンは、日本で見聞したあらゆる事柄をまとめ、1861年に「日本滞在記」A residence at Nagasaki and Hakodate in 1859-1860, with an account of Japan generally をロンドンで出版した。植物関係では、北海道の針葉樹林、チャ・クスノキ・ウルシ・ボタンなどの記事があるが、中にはヒグマのステーキの話まであって面白い。実は、この本の末尾にフッカーが「日本植物総目録」Catalogue of Japan Plants (327~350頁) を発表しているのである。それは、ツェンベリの日本植物誌をはじめとしてそれまでに発表されたすべての植物を網羅し、さらにホッジソンやウィルフォードのほか当時のイギリス領事オールコック Alcock などから送られて来た標本の同定結果を含み、シダ植物と種子植物を合わせて約1600種が記され

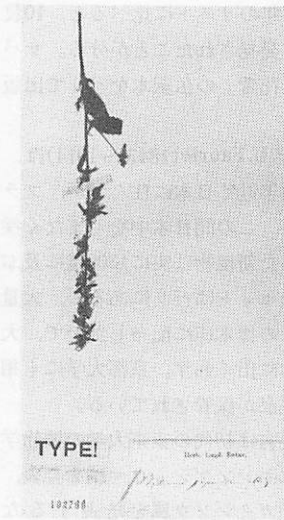


図20 ライデン大学標本館にある
ミッケルの書いた シデシャ
ジンのタイプ標本
(伊藤圭介の採集品)

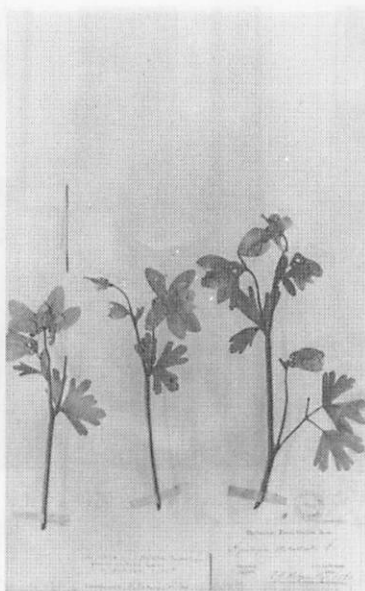
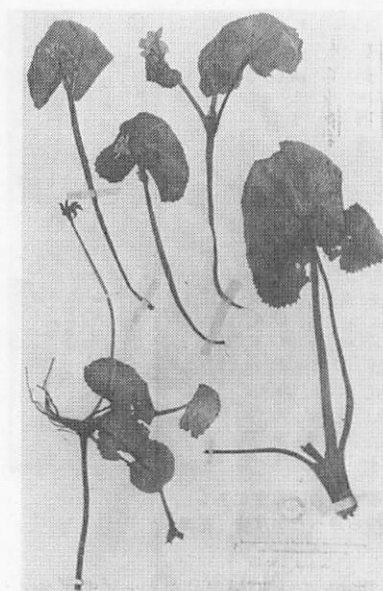


図21 キュー植物園の標本館にあるホッジソン採集のリュウキンカ(左)とオダマキ(右)の標本

ている。最後の3頁はコケ類・藻類・菌類のリストである。

ここにホッジソンが採集したリュウキンカとオダマキの標本を示そう(図21)。ラベルには、ともに Hakodadi. Japan. C. P. Hodgson Esqr. 1860 と記されている。オダマキの標本には、武田久吉博士の1910年5月と記した同定ラベルがはってあった。

キュー植物園は、ウィルフォードに次いで採集家オルダム Oldham を日本に派遣、彼は1861年長崎に到着した。

7. バリ

1860年前後にはイギリスからだけではなく、シーボルトの再訪やロシアのマキシモウィッチの来日が相つぎ、フランスからは、1866年、サバティエ P. A. Savatier (1830~91) が横須賀製鉄所の医師としてやって来た。彼は1871年にいったん帰国、1873年に再度来日し1876年まで滞在するが、滞日中は大いに植物に興味をもち、自ら横須賀・富士山・箱根・熱海・日光・函館などで採集するほか、伊藤圭介・小野職愨・田代安定・田中芳男らとも交友し、彼らを通して多くの標本を入手した。蒐集した標本は、パリの国立自然史博物館に送られ、フランシェ A. Franchet (1834~1900) の研究するところとなった。

その結果、1874年から78年まで5ケ年にわたって、フランシェとサバティエの共著に成る「日本植物目録2巻5冊」Enumeratio plantarum in Japonia sponte crescentium が出版された。長野県に関係の深いタデ

スミレやグンバイヅルは、この目録の中で発表されたのである。すなわち、タデスミレは1巻178番に *Viola Thibaudieri* Fr. et Sav. sp. nov. ... ex bot. Jap. Tanaka (Savatier, n. 99), グンバイヅルは2巻2691番に *Veronica Onoei* Fr. et Sav. sp. nov. ... Ono (Savatier, n. 3789) と記されている(ただし、記載文は省略)。両者の標本は、パリの博物館にそれぞれ1枚ずつ収められているが、タデスミレのラベルには 99 *Viola Thibaudieri* Fr. et Sav.

en bor. Jap. Tanaka と書かれ、グンバイヅルのラベルには 3789 *Veronica Onoei* Fr. et Sav. Nippon, in monte Asama Yama Ono と記されている。これらのデータは「目録」中のそれとは少しずつ違っていて、タイプ・カバーにも収められていなかったが、ともにタイプ標本であることはまちがいない(図22)。Tanaka および Ono とあるのは、いうまでもなく田中芳男・小野職愨のことである。この「目録」には、全部で維管束植物2743種、うちシダ植物196種が収録されているが、フッカーの1861年のリストに比べると、10数年間に1300余種が新しく発見されたことが分る。サバティエは、1873年には「花叢」の仏訳本をパリで出版している。

宣教師フォーリー R. P. U. Faurie (1847~1914) は、1873年から1912年まで40年近く日本に住んだが、フランシェのすすめに応じて、この間日本中をくまなく採集した。彼が自ら発見した新植物は実に1300種に及ぶという。彼の標本の完全セットはパリにあるが、大量に重複品を採集して欧米の標本庫に配布したので、大ていところで彼の標本に出くわす。京都大学にも相当数のフォーリーの採集品が保管されている。

一方、この頃矢田部良吉は初代の東京大学の植物学教授になり、1890年にはキレンゲショウマ属を発表、伊藤篤太郎は1888年にトガクシソウ属を発表するなど、ようやく日本人研究者の独自の活動が始った。1890年、矢田部教授は、「泰西植物学者諸氏に告ぐ」と題する一文を植物学雑誌第4巻に発表、日本の植物分類学の独立を宣言したのである。

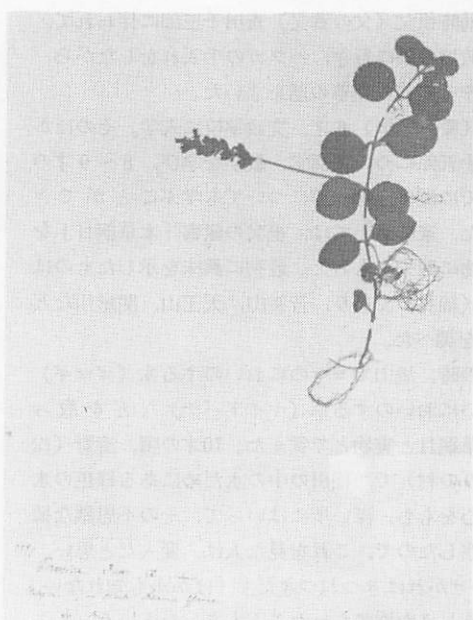
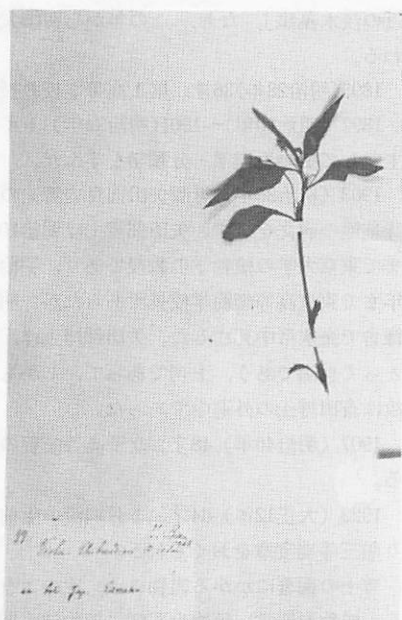


図22 パリ自然史博物館にあるタデスミレ(左)とグンバイツル(右)のタイプ標本

文 献

上野益三 (1973) 日本博物学史 平凡社.

—— (1973) 博物学史散歩その8 植物と文化
No. 8, 50~65.

—— (1974) 同 その9 同 No. 10, 44~59.

小泉源一 (1936) 日本植物の研究 植物分類, 地理
5: 1~26.

長野県植物研究者伝 2

齋 田 功太郎 抄伝

丸 山 利 雄

T. Maruyama: Biography of Dr. K. Saida

長野県出身の植物研究者として、田中芳男の次にあげなければならない学者は、齋田功太郎博士であろう。

齋田博士は、明治・大正の頃の植物に興味を持った青少年には、その著「最新図説内外植物誌」のために、牧野富太郎先生とならんでその名が知られた学者であった。また、東京大学の最初の植物専攻の卒業生であり、わが国はじめての論文提出による植物専門の理学博士でもあった。

齋田功太郎については、平凡社の大人名事典に、次のように書かれている。

「サイダコータロー 齋田功太郎 (1859—1924) 明治大正時代の植物学者。安政6年12月15日に信州松代に生る。少年時代は殆んど学業に就かず樵夫に伍し、田野を耕し、或は木版彫刻を習って生計の一助とした

が、17才東京に出て訓蒙学舎に学び、のち大学予備門の前身官立英語学校に入り、14年卒業し、次いで帝大理科大学地質学科に入り、のち転じて植物科第1回卒業生として出た。19年東京高等師範学校教授嘱託。翌年教授となった。大正13年没。年66。小植物学、大日本植物誌、内外普通植物誌下等植物篇の著があり、佐藤礼介氏と共著の最新図説内外植物誌がある。」

以上の記述のうち、他の文献と著しく異なるものは、少年時代の記述であり、その他にもいくつかの異なる点があるが、そのいずれが正しいかは、確かめることができなかったものが多い。

以下、大人名事典以外の文献によって、年を追ってその事績をあげてみると、次のようである。

1859 (安政6年) 12月、松代藩士齋田虎尾の長男として松代で出生。父は藩校文武学校の文学の先生であ